

〈書評〉

後藤政子 著

## 『キューバ現代史—革命から対米関係改善まで—』

明石書店 2016年

中部大学 田中 高

### 1. はじめに

本書は1959年の革命後、2014年12月にオバマ前大統領がキューバとの関係改善を電撃的に発表し、翌15年7月国交回復、16年3月オバマ大統領のキューバ訪問、11月フィデル・カストロ（以下フィデル）の死去という、キューバ現代史の一連の大きな出来事の流れを理解するうえでの貴重な文献である。著述の対象時期は、革命運動のスタートとなる1950年代初めから米・キューバ関係改善が実現し、フィデルが他界する2016年11月を経て、オバマからトランプに政権が移行する直前までである。

本書の特徴の一つは、キューバ革命を理解する際の歴史認識として、「キューバ独立の父」ホセ・マルティの思想がいかに重要な役割を果たしてきたかを指摘していることであろう。その文脈の流れの中でマルティの「人間は自由な存在である」、「すべての人々の幸せのための社会」、「最も虐げられた人々の解放優先」などの理念が繰り返し紹介される。そしてキューバで現在進められている抜本的な社会主義体制の転換（＝キューバ風社会主義あるいは21世紀にふさわしい社会主義モデル）の模索の根底にあるのは、マルティのこうした理念に近づくことを目標にしたものである、とする。

### 2. 各章の要約

本書は第1章 モンカダ兵営襲撃からシエラ・マエストラへ 第2章 革命勝利から社会主義宣言へ 第3章 キューバ風共産主義 第4章 「ソ連化の時代」 第5章 「社会主義」を見直す 第6章 ソ連解体の衝撃—「革命」の生

き残りをかけて 第7章 「覚悟の決断」へ— “経済発展なくして「革命」なし” 第8章 21世紀のキューバ 計8章からなるが、巻末に1868年第一次キューバ独立戦争から2016年11月フィデル死去までをカバーする年表が掲載されている。

第1章では、1953年7月26日、フィデル率いる121人の若者がサンティアゴ・デ・クーバのモンカダ兵営を襲撃した出来事の記述からスタートする。この時、フィデルは15年の禁固刑を宣告された。54年には法廷でのフィデルの弁論を再構築した陳述、「歴史は私に無罪を宣告するだろう」が地下組織を通して配布される。本章では1868年、セスペデスの指導した第一次独立戦争、1895年のホセ・マルティによる第二次独立戦争の記述から始まり、1898年の米西戦争後のプラット修正条項の動き、さらにグアンタナモ軍基地の領有までの流れを、解りやすく解説している。キューバ政治はその後激動の時代を迎え、1924年マチャード軍事独裁政権の成立、33年バティスタによるクーデターとグラウ政権の発足、34年以降10年間、バティスタが暗躍しながらメンディエタ、バルネー、ゴメスなど目まぐるしく政権が交代した。1940年には、当時のラテンアメリカで最も民主的かつ進歩的とされる新憲法が制定され、選挙によりバティスタが大統領に選出された。

44年にはキューバ革命党アウテンティコ（47年、キューバ革命党はアウテンティコとオルトドクソの二つの党に分裂）のグラウが再び大統領に就任。40年憲法で規定された大地主制度の廃止などには手を付けずに、権力の乱用と蓄財に走った。48年グラウの後継者プリオが大統領に就任。フィデルはオルトドクソ党と関係を維持していたが党首のチバスが自殺。52年の大統領選で、オルトドクソ党のアグラモンテ候補が優勢と察したバティスタは、クーデターにより政権を掌握した。軍を背景にしたバティスタの横暴な振る舞いに、アウテンティコ党、オルトドクソ党などの既成政党は強く反発するが、結局フィデルを指導者とする7月26日運動が革命闘争の中心となり59年1月、革命が成立。

第2章 革命勝利から社会主義宣言へ では、革命直後に大統領に就任したウルティア元最高裁判事が半年後にはドルティコスに座を譲る。61年7月、革命の3大勢力である7月26日運動、ソ連派共産党の人民社会党、学生運動を起源とする革命幹部会（DR）が「統一革命運動」（ORI）を結成し、63年に「キューバ社会主義革命統一党」（PURSC）となり、65年「キューバ共産党」（PCC）が発足した。本章では、米国の封じ込め政策（ソ連原油精製拒否、キューバ糖輸入禁止、外交関係断絶など）、農業改革法、ソ連との関係強化、61年フィデルの

社会主義宣言、プラヤ・ヒロン侵攻事件、62年キューバ危機（核ミサイル危機）にいたる、革命後のキューバを襲った一連の事件を記述している。さらに本書の特徴でもある、マルティの人となりと思想についても、詳しく説明する。フィデルはマルティの、「自由の実現のために闘うことは人間にとって義務」「公正なコンセンサス」「愛と平和」「無償の国際協力」「助け合いの社会の実現」などの思想に大きな影響を受け、このようなマルティの思想はまた、革命後の人種問題、ジェンダー問題への取り組みに色濃く反映されていると指摘する。

第3章 キューバ風共産主義 では、ゲバラ・ベトレームの大論争（1962～65年）が紹介される。「物質的刺激か、精神的刺激か」、「中央集権的経済運営体制か、独立採算制度か」、「社会主義制度の下では価値法則は存在するか」などを巡り、激しい議論があった。しかしキューバ革命の実態は、亜熱帯の明るく陽気な「キューバ風社会主義」であった（116ページ）。ゲバラは「新しい人間」について、自らと共同体のために働く、労働が喜びとなった人間であり、それは誰もが人間らしい生活を享受できる社会で実現する、とした。しかしゲバラ自身、その実現には21世紀を射程に据えた、長い視野が必要であると認識していた。

1970年までに砂糖生産の1000万トンを実現する目標は、ソ連が提案したものであったという。キューバは砂糖モノカルチャーへの後戻りを懸念したが、砂糖増産を軸として、農業近代化に必要な化学肥料や農業機械の生産、電力開発、食料、住宅関連物資の発展を目指すものであった。しかし結局、「精神的刺激」を鼓舞した「大攻勢」1000万トンの目標は850万トンにとどまり、カストロは失敗を認め「自己批判」することになる。

本章では有名なパディージャ事件についても触れている。作家でハバナ大学教授でもあったパディージャは1968年に『ゲームの外で』という詩で、1000万トン計画のために、自発的労働の呼びかけに熱狂的に応える一般大衆に加わることのできない、インテリ的心情を描いたのだが、「革命に水を差す」言動として批判される。これを機に、「表現の自由」が大きな論争となった。フィデルは、経済的に極めて厳しい状況の下で、貧しい発展途上国には「教科書の確保」が最優先で、「耽美的文学作品を印刷」する余裕はない、と断じた。「表現の自由は尊重されるが、革命に反しない限りにおいて」という革命の前提条件を確認した。その後このテーマについて、プリエト文化大臣（1997～2012年在任）は、「詳細に検討し、評価する必要がある」と指摘している。本章ではゲバラとキューバ革命、ボリビアでの死についても触れ、ゲバラの人生が活写される。

第4章 1970年代、キューバは「ソ連化」の時代を迎える。1975年の第一

回共産党大会で正式に、「ソ連型政治経済制度」の導入が決まる。しかしそれは「キューバ風のもの」になっていく。76年に制定された憲法では、マルティ主義とマルクス・レーニン主義が同等のものとして並列されたが、ソ連流のイデオロギーが優位を占めるようになる。経済面ではソ連の経済運営体制を模した「経済運営計画システム」(SDPE)が取り入れられたものの、強い国家規制は残され、漸進的に進められた。

第5章「社会主義」を見直す では、1980年代の「社会主義」の転換期を描いている。ソ連や東欧諸国で顕在化した行き詰まりは、既成の社会主義体制や社会主義思想の限界を露わにし、「社会主義とは何か」が問われ、新しい社会主義概念の追求が始まった。「マリエル港大量亡命事件」はキューバ経済の苦境が背景にあり、批判の目は「革命の成果」にも向けられた。人種差別や性差別の撤廃や宗教の役割についての再評価、さらに既成の社会主義概念の見直しに向かう。ここでもマルティの思想が指摘され、「すべての人々の幸せ、しかし、最も虐げられた人々の解放優先」を強調する。1986年第3回共産党大会では、「75年体制の修正」が議論され、「精神的刺激」と「物質的刺激」の組み合わせの実験と模索が続く。

第6章 ソ連解体の衝撃—「革命」の生き残りをかけて では、1991年ソ連解体を受けて、キューバがどのようにして危機を乗り越えたのかを描く。第4回共産党大会(91年10月開催)、92年新憲法制定のプロセスの中で、「ソ連型」の社会主義から、キューバの固有性を模索するものとなり、従来の社会主義概念の転換、「新しい社会主義」の追求がスタートした。この時キューバ指導部が精神的なよりどころとしたのは、マルティの理想であった。「個人的集团的福祉」「人間の連帯」「助け合いの社会」「自由な人間を律するものは愛と平和」「自由とは他者の自由の拡大」などの理念が強調される。

食料確保のための有機農法、医薬品輸出、観光業の振興などあらゆる方策を動員して、危機を乗り切った。またドル所有の自由化(国内にある個人所有のドルを政府が吸収する)、国有農場の解体、農産物自由市場の再開、個人営業の規制緩和、外資導入の推進などの諸策を導入した。しかしこの結果、「貧困・所得格差・不正の横行」などの副作用も生じた。

第7章「覚悟の決断」へ—“経済発展なくして「革命」なし” は2000年代に入り、キューバ社会主義は「覚悟を決めて」、抜本的な体制転換に乗り出した時期である。対外的にはベネズエラのチャベス政権との関係強化、中国の胡錦濤国家主席のキューバ訪問など、ソ連後の同盟関係の多角化を指摘する。他方米国

のキューバ敵視政策は「一分の隙もない制裁法」であるヘルムズ・バートン法により、カストロ政権を一気に打倒しようとする方向に向かう。このような中、2005年には、フィデルのハバナ大学での講演に注目が集まった。

この講演でフィデルは「社会主義とは何かを知っている」、「社会主義建設の仕方を知っている」ことが、最大の誤りであると述べ、「革命は崩壊するかもしれない」「労働意欲の低下」「腐敗がはびこっている」と現状分析し、「21世紀にふさわしい社会」「あるべき新しい社会主義とは何か」について、聴衆である大学生に向けて問いかけている。

このような流れの中で、2011年4月の第6回共産党大会を迎える。「社会主義経済体制の抜本的転換」が決定され、キューバ社会主義モデルの現代化（注原語は *actualización* で刷新の訳もある。狐崎知己・山岡加奈子訳 補論「キューバ 党と革命の経済・社会政策指針」山岡加奈子編『岐路に立つキューバ』岩波書店 2012年参照）が提案され、キューバ風社会主義体制が模索される。なお共産党一党体制について、「対米関係改善とともに、党外だけでなく、党内でも、多党制への移行が現実の課題になり始めている」（263ページ）と指摘する。

終章となる第8章 21世紀のキューバ はオバマ政権下での対キューバ政策の転換を、米国内事情（国際的孤立、世論の変化、キューバ系移民の意識の変化、関係改善を望む経済界）について解説する。可視化された貧困と格差、ドルを持つ人、持たない人、「強いもの」が波に乗る、「心の内なる差別」、貧困の人種化、解消されなかった革命後の後遺症—住宅問題、後戻りする女性解放、性的マイノリティの運動の発展、「資本家マインドの拡大」対「知の社会」—一人間らしい社会は実現できるか、などの広範囲のテーマについて、魅力的なサブタイトルが並んでいる。そのどれもが、21世紀のキューバに課せられた課題であるといつてよい。

### 3 論評

これまで繰り返してきたように、本書の最大の特徴は、キューバ革命の思想的かつ精神的な支柱としての、マルティ思想の重要性を再確認し、21世紀の新しい社会主義あるいはキューバ風の社会主義の根底に流れるのは、「自由の実現のために闘うことは人間にとって義務」「公正なコンセンサス」「愛と平和」「無償の国際協力」「助け合いの社会の実現」などの革命精神であるとしていることであろう。流動的にも見えるキューバ革命の今後を考察するうえで、欠かせない視



点である。

例えば本年9月初旬、大型ハリケーン・イルマがキューバ北岸を襲い、甚大な被害をもたらした。ベネズエラは大量の援助物資を送ったが、コンテナ貨物が到着したマリエル港で式典が催された。会場にはマドゥーロ大統領とラウル・カストロ国家評議会議長などの両国首脳陣が出席した。この様子を伝えるキューバ共産党機関紙グランマの記事はこんな論調である。「マルティは19世紀の偉大な解放者ボリーバルの銅像を前に、どのようにしてベネズエラの役に立てるのか、と問うた」「ベネズエラとキューバは、ボリーバルとマルティ、マセオの時代から何世紀にもわたり固いきずなで結ばれている」(Granma, 23 de septiembre 2017)。

最後に、些細なことだが以下の一点を指摘したい。「プラヤ・ヒロン侵攻事件」に関する記述で、「米国のB-29が飛来」(83ページ)はB-26の誤り。B-29は4発エンジンの大型爆撃機でB-26は双発である。CIAはキューバ空軍の亡命機と見せかけて偽装するが、カストロはすぐにこれを見破る。この時キューバ空軍にはシー・フューリー戦闘機4機などがあり、ヒロン湾に侵入した傭兵部隊の艦船に大打撃を与えた(詳細はレイスター・コルトマン(岡部広治監訳)『カストロ』大月書店 2005年)。歴史を考察する際に「イフ」は禁物なのだろうが、この時キューバ空軍の活躍がなければ、キューバ革命の行方は異なっていたかもしれない。革命後のキューバを考えると、薄氷を踏むような偶然の出来事の累積が「現在」を形成していることに、改めて感嘆せざるをえない。